

# 「湘北エクステンジプログラム」の教育的効果に関する考察

黒崎 真由美<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学総合ビジネス学科

## 【抄録】

急速にグローバル化が進行する現代社会においては、ヒトやモノの流れのみならず、情報等の国境を越えた活動が活発になり、国際的な相互依存関係が深まっている。一方教育においても、世界的な潮流として、高等教育のユニバーサル化が進行し、従来の文法を中心とした理論的な教育、集团的・画一的な座学教育を中心とした手法の見直しが求められている。多様化した学生に対して、このような教育方法には限界があるからである。

このような時代背景の中、本学では2年間という限られた期間の中で、国際交流教育を通じてその能力を引き出し、育成するための方法として、今日に至るまで様々な取り組みを行ってきた。その一つに、海外姉妹大学との相互交流教育がある。米国、豪州、加国、台湾の教育機関との教員や学生とのものである。本稿では、通常の授業の枠組みを越えて、グローバル化した国際社会が求める人材育成の手法として、海外姉妹大学の教員や学生を受け入れることによって得られる相互の学生への教育的効果を検証し、短期大学における異文化理解教育のあり方について考察するものである。

## 【キーワード】

国際交流教育    異文化理解    ファシリテーション・モチベーション教育

## はじめに

文部科学省は、2003年3月に『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』<sup>(1)</sup>を発表し、その中で、「英語によるコミュニケーション能力の育成のためには、コミュニケーションの手段として活用する経験を積み重ねる必要がある。しかし、わが国においては、日常生活の中で英語に接する機会は少なく、多くの子どもたちは教室で学

習したことを日常生活の中で試してみることが困難な状況の中、子どもたちの学習意欲を如何に高めるかが重要な課題である。このためには、英語学習へのモチベーション（動機づけ）を高めることが必要である。様々な機会をとらえて、異なる文化や生活への理解と関心を深める教育を推進し、英語によるコミュニケーション能力を身に付けることの意義や面白さを理解させるとともに、授業以外で英語を使う機会をできるだけ多く設けたり、挑戦すべき具体的目標を設定したりするなど、英語が使えたという喜びや成就感を与える取り組みが重要である。」と述べている。

---

## <連絡先>

黒崎 真由美    mayumi@shohoku.ac.jp

本学の取り組みは、まさにこのことを具現化したものである。英語系の学科を持たない本学への入学生に対して、海外研修の機会を設定する。研修に参加できない学生には、学内で頻繁に「英語に触れる機会」を提供する。このことによって、英語にアレルギーを持っていた学生が、伝えようという意識を高める。伝えたいという思いが、英語の勉強に熱心になっていく。英語を実際に使ってみるという経験（海外への派遣、留学生や教員の受け入れ、イングリッシュラウンジ等）が、学生のその後の生活に大きな転機を齎した例も多い。本稿においては、様々な取り組みを行っている本学の国際理解教育のうち、「海外姉妹大学の教員や学生を受け入れることが、どのような教育効果を学生に齎しているか」について、過去の受け入れ状況を総括することとともに、豪州ニューカッスル大学学生の受け入れを中心に考察するものである。

## I. エクステンジブプログラムの経緯

(姉妹校からの短期留学生受け入れ状況)

### 1. 米国コネチカット州立大学学生受け入れ

1992年に、厚木市の仲介で米国コネチカット州立大学 (Connecticut State University) と姉妹校提携を締結した。協定書の内容は、ア. 文献や教材の交換 イ. 共同研究 ウ. 教員や学生の交換 エ. 交換授業・研究。その年の6月に、2週間の日程で、主に日本語を学習している者や、日本文化に興味を持っている学生が来学した。引率者は、日本に留学経験のあるコネチカット大学教員1名。すべてのプログラムは、学生交流中心のものではなく、教職員が作成し、エクスカージョンとしての旅行等が中心であった。米国学生の日本体験留学という要素が大きい。

本学からも、2週間の英語研修を中心としたプ

ログラムで、4年間にわたり夏期休暇中に選抜した10名の学生を派遣した。本学が参加学生に対して、費用補助措置を講じた。滞在先は、学生寮。旧知の学生同士の交流ができたというメリットがあった。このことが、現在行われているエクステンジブプログラムの基になっている。

(受け入れ学生総数 34名)

### 2. 豪州国立ニューカッスル大学・国立オーストラリアンカソリック大学学生の受け入れ

上記の経験を踏まえ、短期海外研修の実施先であった豪州に姉妹校探しを行った。現地調査を十分に行い、治安の面や日本人の比較的少ないニューサウスウェールズ州にあるニューカッスル大学 (The University of Newcastle) 〈以下UN〉と1992年に、1996年にはオーストラリアンカソリック大学 (Australian Catholic University) 〈以下ACU〉と姉妹校提携を締結した。両校との姉妹校締結にあたっては、名目だけにならないよう学生や教職員の交流を活発に行うことを念頭に、担当者同士の話し合いが継続された。

当初は、豪州両大学の日本語教員を介して学生の派遣が行われていた。その結果、派遣されてくる学生は、日本語の授業を履修している者に限定され、組織だった指導体制が整っていなかった。大学間の交流でありながら、本学と先方の教員個人の努力による取り組みの感が強かった。

UNは、シドニーから200キロ程離れたニューカッスル市にあり、6学郡 (Faculty) 14学部 (School) を有し、郊外型大学では、国内最大の規模を持っている。学生数は30,340名 (2008年度現在)。熊本大学、名古屋外国語大学、成城大学、東京家政大学、山口大学等とも教育に関する協定を締結している。海外からの留学生も多く (80ヶ国から3,000人)、International Admissionsが、窓口となっている。上記大学とのエクステンジブは授業料相互

不徴収の形を取っており、何名かの学生交換が行われている。当然、航空運賃や生活費は個人負担であり、多数の学生が志願している状況にはない。後述する表に記載したが、当初は本学への短期留学生も少なかった。11月に行われる本学のプログラムに参加した学生は、帰国後にプログラム内容を大学に報告する。この積み重ねが評判を呼び、口コミで他の学生に喧伝する。プログラムに参加した学生は、日本学習の大きなモチベーションを獲得し、再度長期の日本留学を果たした例も多い。日本学修のモチベーション教育として大きな位置づけをもっていた。もっとも大きな転機は、2007年に、日本国内の姉妹校訪問のために、UNの総長・副総長が来学したことである。その際に、過去のプログラム内容の詳細説明を本学の学生とともにいった。総長・副総長は、本学の取り組みに共感し、絶大なバックアップ体制を表明してくれた。2008年からは、Scholarship Programとして、全学的な募集活動が開始された。本プログラムへの志願者は2008年度1,600名、2009年度400名を数えた。(募集人数 15名) 在学中の成績と所属する学部への指導教員からの推薦書で選ばれた15名の学生は、誇りを持ってプログラムに参加している。現地関係者からは、「数ある姉妹校交流の中でも、最も有意義なものの一つである」という、評価を得ている。様々な文化的背景・異なる専攻で学修している者が、共通の目的で学修している姿を目の当たりにして、教育の共通性を見ることが出来る。

(受け入れ学生総数 UN 117名、ACU 101名 合計 218名)

UNとは、学生のみならず、教職員の相互交流も活発に行われている。本学へは、例年招聘しているEnglish Language and Foundation Studies Centreの英語教員が、学生の指導のみならず高校訪問や特別講演実施時に、オーストラリアの文化を伝える。高校や中学校の教員対象に、

Communicativeな英語教授法の紹介講座を受け持つ。2004年には“Challenges and Opportunities of Teaching English in Japan”、2005年には“The Undervaluing of Non-Native-English Speaking Teachers”、2007年には、“English in Japan; the challenges, the opportunities, and some thoughts of the future”と題して同センターのDirectorである、Professor Seamus Faganによる特別講演が、高等学校・中学校教員を対象にして行われた。2005年には、副総長であったProfessor Brian Englishによる特別講演“Social Wellbeing in Multi-Cultural Australia”が開催され、学生・教職員・厚木市民等、多数の聴衆を集めた。

一方本学からは、毎年実施している短期海外研修旅行時の引率教職員が交流を行っているし、2002年には、「姉妹校提携10周年記念」の特別講演として、山田前学長が“Product Development at Sony—From Walkman to AIBO”という演題で、2008年には、客員教授として招聘された筆者が、“Nature Writing in the U.S. and Japan: A Comparison”という題目で、大学院生や研究者を対象に特別講義を行う等。双方向の学術的な交流も実現されている。

### 3. 加国州立ビクトリア大学学生受け入れ

商経学科(現総合ビジネス学科)と生活科学科(現生活プロデュース学科)に設置された、3ヶ月留学クラスの学生をビクトリア大学(University of Victoria)ランゲージセンターに派遣していた。(1999年まで継続)その関係で、1998年に姉妹校提携を締結した。ビクトリア大学学生の受け入れについては、日加コー・オブ・プログラム(The Canada-Japan Co-op Program)<sup>(2)</sup>の制度を利用し、1997年の前期にビクトリア大学の工学部に在籍する学生2名を日本に受け入れた。学生は、ソニー厚木テクノロジーセンターでインターン

シップを行い、週1日はイングリッシュラウンジ担当となり、本学の学生と交流した。教育交流と日本企業での実務経験の実施という点で大きな意味を持った。

(受け入れ学生総数 2名)

#### 4. 台湾嶺東商業専科学校学生受け入れ

学内に日本語学校を設置していた関係で、台湾にある嶺東商業専科学校と1994年に姉妹校提携を締結した。計画の中には、外国語科目としての中国語を学ぶ本学の学生を台湾に派遣するという計画もあったが、諸般の事情により、実現できな

かった。台湾の冬季休暇を利用して日本への研修を行っていたが、そのうち数日間を本学学生との交流の場として活用した。学生部が中心となって、日本紹介のプログラムを組み、本学学生との交流を行った。

(受け入れ学生総数 135名)

## II. 豪州国立ニューカッスル大学学生受け入れに関する考察

### 1. 交流計画

過去のプログラムに関しては、参加した学生か

#### 姉妹校からの受け入れ状況

西暦	大学	国	受入数	西暦	大学	国	受入数
1992	Connecticut State University	米国	10	2000	The University of Newcastle	豪州	4
1993	Connecticut State University	米国	10		Australian Catholic University	豪州	11
1994	Connecticut State University	米国	8		Ling Tung Vocational School	台湾	12
	The University of Newcastle	豪州	7	2001	The University of Newcastle	豪州	9
Australian Catholic University	豪州	4	Australian Catholic University		豪州	9	
1995	Connecticut State University	米国	3	Ling Tung Vocational School	台湾	16	
	Ling Tung Vocational School	台湾	19	2002	The University of Newcastle	豪州	11
1996	Connecticut State University	米国	3		Australian Catholic University	豪州	15
	The University of Newcastle	豪州	7	2003	The University of Newcastle	豪州	8
	Australian Catholic University	豪州	4		Australian Catholic University	豪州	14
	Ling Tung Vocational School	台湾	20	2004	The University of Newcastle	豪州	10
1997	The University of Newcastle	豪州	2		Australian Catholic University	豪州	15
	Australian Catholic University	豪州	4	2005	The University of Newcastle	豪州	4
	Ling Tung Vocational School	台湾	20		Australian Catholic University	豪州	17
1998	University of Victoria	加国	2	2006	The University of Newcastle	豪州	10
	Australian Catholic University	豪州	6		Australian Catholic University	豪州	13
	Ling Tung Vocational School	台湾	24	2007	The University of Newcastle	豪州	13
1999	The University of Newcastle	豪州	4		The University of Newcastle	豪州	15
	Australian Catholic University	豪州	3		The University of Newcastle	豪州	14
	Ling Tung Vocational School	台湾	24		合計		404

## 「湘北エクステンジプログラム」の教育的効果に関する考察

らのアンケート結果(日・豪両方)や、地域との連携、高校生を中心とする広報的な観点をにらみ、毎年マイナーチェンジを加えて、最善のものにすべく計画を作成している。本学の授業期間中(11月～12月)に実施するために、学生の時間割を考慮しなければならない。国際交流委員会に所属する学生が、何らかの形で全員が参加できること。地域住民との交流を必ず入れること。豪学生の日本学習のためのモチベーション教育になること等を念頭に置いている。

この活動の中心となるのが、学友会国際交流委員会の学生である。2009年度は、3学科から84名の学生が所属し、活動を行っている。年間の計画は、学生主体で検討が進められる。以下は、2009年度の学生の活動状況である。

- 4月 CLI(Campus Life Information)、定例会(毎週)、国際交流タイムズ発行
- 5月 定例会(毎週)、招聘教員ウェルカムパーティー、国際交流親睦会、リーダーズキャンプ、国際交流タイムズ発行
- 6月 定例会(毎週)、ビデオカンファランスⅠ、七夕コンテスト短冊募集(日本語、英語)、国際交流タイムズ発行
- 7月 定例会(毎週)、七夕コンテスト実施、招聘教員フェアウェルパーティー、国際交流タイムズ発行
- 8月 合宿(学園祭、エクステンジプログラムを考える)、リーダーズキャンプ
- 9月 定例会(2回)、学園祭展示発表準備、国際交流タイムズ発行
- 10月 定例会(毎週)、学園祭展示発表、エクステンジプログラム準備、国際交流タイムズ発行、スマトラ沖大地震募金活動
- 11月 定例会(毎週)、英語スピーチコンテスト、ビデオカンファランスⅡ、エクステンジ

- プログラム、国際交流タイムズ発行
- 12月 定例会(2回)、エクステンジプログラム、国際交流タイムズ発行
- 1月 定例会 冬季リーダーズキャンプ、1年生への引継ぎ

顧問教員のアドバイスによって作成された活動計画は、大きな目標設定(招聘教員との交流や学園祭における展示発表、英語スピーチコンテスト、エクステンジプログラム)に向けて、徐々に内容を深めるように配慮されている。学生の諸活動のハイライトになるのが、11月から12月に実施される「エクステンジプログラム」である。プログラムは、行政機関や厚木市民との交流の視点、高等学校や小学校などへの訪問交流の視点、本学教員の授業の視点等が考慮され、学生との間でスケジュール調整を行い、決定される。

## 2. 交流計画の特色

エクステンジプログラムを作成するにあたっては、以下の点に留意している。

- (1) 学生の交流計画を優先している—グローバルコミュニケーションセンターと学生の組織である国際交流委員会で、エクステンジプログラムを作成するが、時間割との関連を見ながら、学生が実施したい計画を提出させる。ポイントになるのは、計画が教育的な意味合いを持っていること。いわゆる「観光旅行」のような計画は認められない。決定された学生の交流計画は、企画書の提出が義務付けられ、顧問に提出される。顧問は内容を吟味し、グローバルコミュニケーションセンター長に提出。センター長は全体のスケジュールと内容を考慮して、実施計画を決定する。
- (2) 厚木市との連携や市民との交流、高校訪問を設定している—特に、毎年度市長表敬訪問を

実施プログラム例 (2009年度実施 プログラム) 注:表中の〈学生〉は、学生が企画もしくは、関わるもの。

**2009 SHOHOKU EXCHANGE PROGRAM  
UNIVERSITY OF NEWCASTLE  
(20th NOVEMBER - 6th DECEMBER 2009)**

SUNDAY	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY
					<b>11/20</b>	<b>21</b>
					<b>Arrival</b>  Checking in the SONY dorm 〈学生〉	<AM> Orientation  <PM> English Speech Contest 〈学生〉
<b>22</b>	<b>23</b>	<b>24</b>	<b>25</b>	<b>26</b>	<b>27</b>	<b>28</b>
Sightseeing: KAMAKURA 〈学生〉	<AM> I Orientation & Guided Campus tour 〈学生〉  <PM> 12:30~13:20 Welcome Lunch 〈学生〉 III Jap. Manner IV Campus Orien- teering 〈学生〉	<AM> 11:00 Meet Atsugi City Mayor  <PM> III Japanese 1  IV Activities planned by Shohoku 1 <sup>st</sup> year students 〈学生〉	<AM> Japanese Cooking 〈学生〉  <PM> High School Visit Aihara High School 〈学生〉	<AM>  II Traditional card game "Karuta" 〈学生〉  <PM> III Free  IV Sports activities 〈学生〉	<AM> I Japanese Tea Ceremony 〈学生〉  II Japanese Dietary Tradition, "Mochi-Tsuki"  <PM> Meet and visit host family	Free with HOST FAMILY 〈学生〉       HOMESTAY
<b>29</b>	<b>30</b>	<b>12/1</b>	<b>2</b>	<b>3</b>	<b>4</b>	<b>5</b>
Free with HOST FAMILY	<AM> I Japanese Traditional Game 〈学生〉 II Jap. Traditional Folk Dance  <PM> III  IV Japanese Seasonal Events 〈学生〉	<AM> I Jap. handicraft (Paper Fan) 〈学生〉 II Japanese 2 <PM> III Visiting Class IV Japanese Traditional Dance; Sagami Satokagura & WADAIKO played by Tamagawa Junior High School students	<AM> I Japanese Bon Dance 〈学生〉 II  <PM> III "JUNI-HITOE" demonstration  IV Jap. Calligraphy 〈学生〉	<Full Excursion>  Visit to Sony The Square  <PM> Free in Tokyo	<AM> I Discussion 〈学生〉 II Special Lecture by Mr. Sawaguchi  <PM> III Presentation by Australian students  IV Summing up  V Farewell Party 〈学生〉	Free
<b>6</b>						
<b>Departure</b>						

[NOTE]

- The above schedule is subject to change.
- School bus is available between Hon-Atsugi station and campus. (free)

Time Table:

Mon-Fri (except Wed)

I : 9:20 – 10:50
II : 11:00 – 12:30
III : 13:20 – 14:50
IV : 15:00 – 16:30
V : 16:40 – 18:10

Wednesday

I : 9:00 – 10:30
II : 10:40 – 12:10
III : 13:20 – 14:50
IV : 15:00 – 16:30
V : 16:40 – 18:10

はじめとして、厚木市政策部秘書課友好交流係にご協力をいただき、様々な取り組みを行っている。また、「厚木ホームステイの会」の協力で、市民宅へのホームステイやもちつきなどの活動行事を設定し、多くの市民の参加を得ている。短期大学教育は、地域に根ざして推進していかなければならないということ念頭に置いたものである。また、広報的な観点で、高等学校や中学校の訪問計画をプログラムに入れている。

- (3) 日本学習をプログラムに入れる—参加する学生の専門は様々ではあるが、いずれの学生も日本学習に興味を持っていることから、日本語の基礎、日本の伝統料理（本学には、生活プロデュース学科があり日本料理に関する専門教員が在籍学生を含む交流計画を作成することが可能）、日本のビジネスマナー、ホームステイの諸注意等の「日本学」。いずれも本学の教職員が担当する。
- (4) ディスカッションのための課題連絡を事前に行っている—本学学生が、事前に課題を豪州学生にメールで連絡し、準備を行う。今年度は、“Ecology”に関して。プログラムの終盤で2年生が中心となり、意見交換を行った。この内容は、「ディスカッションのまとめ集」として、毎年記録に残す。
- (5) エクスカーションとしての、日本の特色のある地を訪れる—古都鎌倉、ソニー・ザ・スクエア、浅草等。この計画と実施は、全て本学の学生が行う。
- (6) プログラムの最終日にオーストラリア学生主催のプレゼンテーションを行う—エクステンジプログラムの締めくくりとして、オーストラリアの学生が考えたプログラムを本学の学生に対して発表する。

### 3. 学生指導の手法

学生指導については、グローバルコミュニケーションセンターという学科横断の組織（「グローバル化が進む現代社会では、単に外国語を修得するだけでなく、お互いを理解することのできるコミュニケーション能力が必要とされています。グローバルコミュニケーションセンターでは、国際社会で生きるための知識・コミュニケーション能力・行動力を兼ね備えた人材の育成を目指します。英語・中国語をはじめとした外国語教育、CALL演習室を利用した最先端の英語教育、海外姉妹大学との語学研修や国際遠隔教育、交換留学生の受け入れ交流、英語スピーチコンテストやイングリッシュ・ラウンジ等を中心に、年間を通じて『学生主体のプログラム』が充実しています。」本学ホームページから抜粋）が、中心となって、ニューカッスル大学との交渉、プログラム作成、学生への指導が行われる。毎年多くの学生が在籍する国際交流委員会への指導は、教員と職員が混在したこの組織が中心となって行われる。

センターメンバーは、学生の定例会やイベントに出席し、指導と助言を与える。指導する際のポイントは、

- ①課題（目標）を明示すること。
- ②グループのリーダーを、通常の活動の様子から選抜し、事前に指導を行うこと。
- ③適切なグループを編成し、その中にもリーダーを置くこと。
- ④グループアクティビティーへの介入は最小限にとどめ、まったく異なる方向におそれそうな場合のみ、ヒントを与える。
- ⑤選抜したリーダーを中心に、メンバー全員の発言ができる環境を促す。
- ⑥事後に必ず「ふりかえりの会」を設定する。このことにより、学生は「自分たちで」企画を行い、それが実現できる「喜び」や「達成感」を感じ取

ることができ、学生生活や卒業後の社会生活の中でその力を発揮していく。

言い換えれば、我々教職員は、学生に対して、『触媒としての役割』を果たすのである。ここに、知識伝授型の教育では得ることのできない体験（参加型）教育の効果を見ることができる。

「ゆとり世代の学生は考えることをしない」「協調することができずに孤立する若者」「学力不足」などという風潮の中で、手間をかけて教職員が同じ方向でそのきっかけを与え、実践させれば、その効果は驚くほど大きいということを過去の経験で共有している。教職員は、学生の成長を目の当たりに感じ取り、教育や指導へのモチベーションを高めることができるという、F/SD活動の側面もある。

#### 4. 教育的効果（本学の視点）

本学「国際交流委員会」学生への教育効果として考えられることは、外国で生活している同世代の人が何を考え、どのように生活しているのかを話し合いや実際の交流を通じて学ぶことができるという点にある。

この交流が学生主体のものであるということ意識させ、6月から周到な準備が行われる。実行するまでに、国際交流委員会学生84名が目的を理解し、授業の合間を利用し、活動を行い、それなりの成果を上げることができることは評価すべきことである。学生それぞれが、その役割の中で一つのことを成し遂げる達成感や満足感を得ることができる。

特筆すべきは本学の学生の英語に対する取り組みの変化である。エクステンジプログラムで、「英語」というツールを使って説明や交流・スピーチをするために、それぞれが必死で英語学習に取り組む。英語について努力した結果を、リアルタイムに感じることができる。

国際交流委員会定例会での指導（毎週1回）に加え、夏季合宿、委員会学生全員に対しての「企画書講座」を実施する等、年間を通じて学生の指導を行う。学生たちは、企画を行い、実行し、考察することの重要性や人間関係・連携の大切さを学内の活動の中で学ぶ。それは、今後の彼らの人生に有形無形に影響を及ぼしていく。

また、マルチ民族国家である豪州社会の学生を受け入れる効果も見逃すことができない。単一民族である日本の学生が、異なる文化的な背景を持つ人々と実際に触れ合うことは、非常に重要な意味を持つ。現代のインターネット社会では、外国についての情報や知識を容易に手にすることができる。しかし、真の理解を推進するためには、その国の「人」と個人的接触を行うことが最善の方法である。その機会を設定し、その舞台に学生を登場させる。

時代が移り、学生の多様化がどんなに進んでも、我々教職員は、一人ひとりの学生を掌握し、信頼関係を構築することにより、学生が成長を遂げるという事実を、経験を通じて獲得していく。一連の活動を通じて培った「コミュニケーション力」、「企画力」、「統率力」、「実行力」を社会生活の中に活かしていることは、過去に国際交流委員会に在籍した多くの卒業生から仄聞していることである。大学生生活の大きな位置を占めたであろうこの活動によって、国際化の何たるか、人間共通の認識等、それぞれが有形無形の「何か新しいこと」の発見につながってくれたことを信じている。また、実績を積んできた「豪州教員招聘」や「イングリッシュラウンジ」等の効果が、「臆せず会話できる」、「コミュニケーションできる」能力は確実に彼らに定着していることを感じとる機会でもある。

ファシリテーションとは、

①方向性を示してやること。

「湘北エクステンジプログラム」の教育的効果に関する考察

- ②とにかく学生にやらせてみること。
  - ③軌道を逸れないように、支えること。
  - ④決して放任しないこと。
- が大切であることを再認識している。

また、4学科構成である本学の状況を活かして、特定学科の学生交流にとどまらず、複数学科の教員を配した「特別授業」、「生活プロデュース学科のゼミナールを通じた交流」、「保育学科や情報メディア学科の授業参加」等。全学的な取り組みとしても実行している。

恒例の厚木市長表敬訪問や8年目となる「厚木

ホームステイの会」によるホームステイ受け入れ、厚木市や教育委員会を通じた、英語スピーチコンテストの後援、相模里神楽、玉川中学和太鼓実演等の交流を通じて、地域との連携を実施できる点も収穫の一つである。

「教員と職員の協力・連携」という面においても、「課外活動も重要な教育」という位置づけを意識した協働作業が行われている。企画を実行するための準備のみにとどまらず、学生を指導することにおいても、大きな成果を得ている。

国際交流委員会在籍学生へのアンケート結果と分析（回収 79件）〈質問項目抜粋〉

注：ExP = 「エクステンジプログラム」

	質問項目	Yes	割合	No	割合
1	国際交流委員会活動の体験は自分のために役立っていますか。	78人	98.3%	1人	1.7%
2	国際交流委員会に所属して良かったと思っていますか。	69	86.4	10	13.6
3	オーストラリア学生受け入れのエクステンジプログラム(ExP)は自分のために役立っていますか。	75	94.9	4	5.1
4	ExPに参加したことで外国人に対する親近感が増しましたか。	73	91.5	6	8.5
5	ExPに参加したことで、英会話力は向上したと思いますか。	38	47.5	41	52.5
6	日本と外国の文化の違いがExPによって理解できましたか。	69	86.4	10	13.6
7	国際交流委員会活動を行って困ったことはありますか。	23	28.8	56	71.2
8	イングリッシュ・ラウンジに参加しましたか。	76	96.6	3	3.4
9	招聘教員とは交流できましたか。	69	86.4	10	13.6
10	国際交流委員会の活動であなたが得たものは何ですか。(複数回答可)				
	1. 企画力	36			
	2. コミュニケーション力	54			
	3. 実行力	24			
	4. 英会話力	23			
	5. 忍耐力	22			
	6. 積極性	29			
	7. 団結力	32			
	8. 考察力	14			
11	大学に入学する前から、湘北の国際教育を知っていましたか。	30	37.3	49	62.7

分析：

アンケートは、一連の国際交流プログラムの最後を飾る、エクステンジプログラムが終了した12月中旬の定例会開催時に実施した。対象は、今年度国際交流委員会に所属している84名。そのうちアンケートの回収数は、出席していた79名。

大部分の学生が、国際交流委員会活動を行うことが大学生活に大きな位置づけを占め、その活動に満足していることがわかる。特にエクステンジプログラムを企画・実行することによって、チームで活動するための準備の大切さやコミュニケーション力を涵養することができたと思っている。自由記述欄では、「イングリッシュラウンジに参加することや招聘教員と触れ合うことによって、外国人に対する積極性が養われ、エクステンジプログラムでもそれが発揮できた。」という意見があった。キャンパスの中で、日常的に英語に触れる機会を持つことの重要性を見ることが出来る。特筆すべきは、エクステンジプログラムに参加したことで、英会話能力が向上したと答えている学生が、38名(47.5%)いることである。英語学習のモチベーションを得るとともに、その結果として能力が向上したと考える学生が多いということに、大きな意味がある。前述したように、このプログラムの準備には半年間という時間をかける。1年次にプログラムを経験した2年生は、その意義や内容を映像や資料を利用して後輩に伝える。先輩が生き生きと後輩に伝えることによって、1、2年生全員が同じ認識で、少しでも進化したプログラムを目指す。

以下は、年度初めの定例会の中で国際交流委員会のリーダーが、1年生を前にして話した言葉である、「海外には興味を持っていたのですが、私は高校の頃は、英語が苦手でした。大学に入ってから、最初は、授業を受けて時々アルバイトをして過ごすのかな。と漠然と考えていました。そん

な時に、国際交流委員会の先輩のサークル紹介プレゼンテーションを聞いて、これだと思いました。なぜならば、先輩の話し振りや生き生きとした表情に衝撃を受けたからです。英語が苦手でも大丈夫です。楽しみながらたくさんのことを学ぶことができます。また、たくさん先生方がケアしてくれます。」1年間の活動を経た後の、自信に満ちた表情が非常に印象的であった。

2年生の委員が中心となってプログラムを運営していくが、留学生に対する説明は、全て英語で行われる。それぞれの学生には、英語教員の時間をかけた個別指導が行われる。英語が苦手だと思っていた学生も、明確な目標に向かって努力すれば、結果を得られるということが体験を通じて自覚できる。また、半数以上の学生が「コミュニケーション力を得ることができた。」と述べている。

委員会活動においては、

- ①同世代間のコミュニケーション
- ②教職員とのコミュニケーション
- ③異文化で育った留学生とのコミュニケーション
- ④地域社会の方とのコミュニケーション

上記、それぞれに対応するコミュニケーション能力が必要とされる。彼らは、短期間にキャンパスの中で、このことを体験する。高度情報化社会・核家族化が進行する現代社会の中で、対面して行うコミュニケーション能力の涵養は、大きな意味合いを持っている。

また、「大学入学前から本学の国際教育を知っていたか」という設問に対して、委員会に所属する学生の3分の一以上が、「Yes」と答えている。様々なプログラムは連携高校をはじめとした高校生にも開放している効果であると思われる。広報的な一面も見逃すことができない。

## 5. 教育的効果 (ニューカッスル大学の視点)

ニューカッスル大学International Admissionsが、本学のエクステンジプログラムの窓口となり、総長や副総長の強力なバックアップによって、複数学部の学生にスカラシップ制度として、プログラム内容の告知が行われる。2009年度は、400名の志願者から成績と担当教員の推薦状および日本・日本語に対する興味によって、15名のエクステンジ学生が選抜された。筆者が本学学生の3ヶ月留学引率渡豪時には、選抜された学生に対して、事前のオリエンテーションを行っている。参加学生の専門領域は、工学、美術、言語学、語学、法律、心理学、保育学、教育学、福祉、コミュニケーション、医学等と多岐にわたる。彼らにとって日本を経験し、日本語に触れる好機であったのは言うまでもない。わずか17日間という期間に日本をダイジェスト版で体験できる貴重なものであったはずである。異文化を実際に体験し、その国の人と直接かかわり合うことでしか学べないたくさんのかことを学習した。個人主義の彼らが、初めて集団で行動する重要性を学んだ機会でもあった。このプログラムに参加しなければ知り合うこともなかった異なる専攻の学生同士が、本学を媒介として同じプログラムを遂行したことによる効果も見逃すことができない。帰国後も「同窓会」を設立し、旧交を温めている。

エクステンジプログラム開始日に合わせて開催している「英語スピーチコンテスト」を参観することによって得た日本人の若者の考えは、その後の意識に大きな影響を与えている。また、高校生や本学学生との交流、とりわけホームステイの体験は日本を理解する上で、非常に有意義であったと参加者全員が述べている。短期間のプログラムに盛り込んだ様々な学習は、決して専門的で深い内容のものではないが、過去のエクステンジプログラム参加者が、その後に長期の日本留学を

果たした。プログラム参加をきっかけに日本語を履修し始めたという学生も多いことから、「日本語学習のためのモチベーション教育」として、大きな役割を果たしているものと推察される。

過去に本学に滞在し、エクステンジプログラムを体験したUNの教員は、このプログラムについての教育的な意義を、“As the word ‘educate’ means to ‘lead out’, by developing the knowledge, skills and character of students then the Shohoku Cultural Exchange Program does exactly that... Through these many wonderful first hand experiences, the Australian students gain a deep understanding of the Japanese character and therefore in the future will learn tolerance and acceptance of cultures different from their own.” (強調筆者) と述べている。

また、UNのInternational Admissionsの責任者からは、以下の内容で報告を受けており、このプログラムがオーストラリア学生に与えた影響の大きさを示している。“I’ve received many reports from the group that they had a fantastic time and were overwhelmed by the effort, sincerity, and friendliness from your staff and students. I would like to thank you and the College for once again providing our students with a life changing opportunity.” (強調筆者)

現地関係者からの評価は、まさに教育のグローバル化を示している。急速な変化を見せる社会の中では、一人ひとりの「意欲＝モチベーション」をあげることが、重要であることを感じ取ることができる。

## まとめ

アメリカの社会教育学者であるマーティン・ロー<sup>(3)</sup>による「大学発展段階説」では、高等教育

機関における就学率の変遷を以下のように分析している。進学率15%以下—エリート教育、50%まで—大衆(マス)教育、50%以上—普遍(ユニバーサル)教育。高等教育機関への進学率が50%を超えた日本の情勢下では、当然のことながら、研究中心の使命を教育中心のものへと転換する必要性がある。

「英語学習」に関しても、ユニバーサル化が進化する短期大学の教育手法については、大いに改善の余地があると考えている。能力向上のために重要な基礎になることは、「学ぶ意欲」を喚起し、それをどれだけ維持できるかということにある。正規の科目としての「英語」も、少人数でInteractiveなものに変えて、効果を上げる必要があるし、それと平行して行う正課外活動としてのエクステンジプログラムが、英語を使える機会として、有効であることは疑いのないところである。

前述したように、エクステンジプログラムは、一義的には同世代の姉妹校の学生をキャンパスに迎え、交流を行うことによって、本学の学生の「意欲」や「コミュニケーション力」、「ホスピタリティーマインド」、「実行することによる達成感」を獲得させようとするものである。二義的には、豪州留学生の「学習意欲」や「日本理解」につなげることを目的としている。「意欲」の醸成は、両国の学生個々の生活に大きな影響を齎している。

今後も、目標設定に変化はないが、昨年度開始したニューカッスル大学日本語学科学生とのビデオカンファランスを利用した交流については、それぞれが学ぶ言語(日本語、英語)で交流する学習機会を持つことを継続して行い、効果を検証する予定である。

本稿に記述した、エクステンジプログラムをはじめとした諸種の取り組みは、すべてが有機的に連携し、学生の成長を促進するものである。

その根底にあるのは、学生の成長を喜びとする教職員の教育に対する情熱と使命感であり、諸活動に賛同してくれる海外の教育機関との親密なグローバルコミュニケーションである。日頃から教育に対する情報交換を行い、良好な人間関係を構築していかなければならないということ結びとしたい。

#### (参考)

- (1) 英語が使える日本人育成のための行動計画  
文部科学省 2003年3月31日発表
- (2) The Canada-Japan Co-op Program  
日加コー・オブ・プログラムは、カナダ全域の大学、カレッジの高等教育機関で構成され、日本産業、企業に興味を示す理工学部、ビジネス、文系の優秀な学部生と日本の産業、企業を結ぶパイプ役を担うインターンシッププログラムである。学生の大学教育と日本企業での実務経験の実現を目的としている。現在、ブリティッシュ・コロンビア大学にプログラムオフィスが設置されている。これまでに、716名の学生が日本企業での研修を経験している。  
The Canada-Japan Co-op Program 2008/2009 Year End Report より
- (3) マーティン・トロー  
アメリカの社会教育学者。高度情報化社会の教育についての分析を行った高等教育論の第一人者。

## An Inquiry into the Educational Effectiveness of the Shohoku Exchange Program

KUROSAKI Mayumii

### **[abstract]**

Globalization is proceeding at full speed and mutual dependence on an international level is deepening. Concurrently in the educational world, the universalization of higher education brings diverse students for whom the traditional style of teaching seems ineffective.

In such a context, Shohoku College tries to develop the abilities of the students through international exchange within a limited time of two years. The Shohoku Exchange Program is one such program that ensures benefits to Shohoku students and their foreign counterparts. This paper aims to inquire into the educational effectiveness of the program and to examine the importance of cross-cultural understanding in the two-year college.

### **[key words]**

international exchange, cross-cultural understanding

